

上総一宮町の古代文化



江 沢 中 葉

一 東総地方の先史時代文化

1 縄文式文化

東上総の夷隅、長生両郡下に就いて、先史時代人類文化の跡を概観すると、幹線の延長が実に六七・五kmに及ぶ夷隅川と、延長凡そ二七・五kmの一宮川に沿う第三紀層及び洪積台地上に位する遺蹟と、九十九里平野に点在する低地遺蹟とに大別することができる。

房総南部の丘陵上に在る遺蹟の中では、夷隅町の引田、行川、増田、大多喜町の船子、横山等の遺蹟は夫々夷隅川に臨み長南町芝原、久原、西湖峯台、地引、中之台、睦沢村佐貫西之谷、同大上房谷、茂原市石神等の遺蹟は一宮川支流に添い、奥地では長柄町の権現森遺蹟のように二二〇m前後の高地にまで先住民の遺蹟を求め得られる。黒潮の逆巻く外洋に面した九十九里平野では、海拔僅かに一〇m、現在の水田下にひそむ遺蹟も幾つかを数えられ、上総一宮町貝殻塚、本納町上太田、茂原市渋谷等を始めとして広漠たる沖積平野には二十余の遺蹟が知られている。

これ等の遺蹟の中では、上総一宮、茂原市石神の両貝塚の他、二、三の貝塚を認める以外は概ね包含地であり、その規模も狭小なもののみである。概して若い地層から成り立っている房総半島の中でも、その生成が僅かに三、四千年にすぎない九十九里平野に点在する遺蹟では、縄文式文化の後晩期に属するものが大部分を占め、丘陵上に位する遺蹟発見の遺物についてみても東上総地方の先史時代文化は、縄文式中期以前にさかのぼる資料には未だ接していない。

即ち、阿玉台、勝坂式、加曾利E式等の中期文化の所産から、堀之内式、大森式に次いで安行の各型式を含む後期の文化に及ぶ遺物を主とし、これに晩期の若干型式を出土するのが当地方の縄文式遺蹟一般の姿である。そして以上に述べた各文化期の遺物を通じて観ると、その大部分は土器であって、石器の発見が極めて少ないのは、「石無しの国」と称され、地下資源の乏しいこの地方では、原石を遠隔の地に求めなければならなかったために、十分に利用できなかったがためである。

2 弥生式文化

東上総を通じて、弥生式文化の研究上に最も著名な遺蹟は茂原市綱島宮之台遺蹟を挙げることができる。杉原莊介氏によって「宮之台式」という一型式が学界に発表されたのに溯り、我が国の弥生式文化の研究上に多大の貢献をした遺蹟で、茂原市猿袋、長南町芝原、久原、西湖、睦沢村上之郷谷原遺蹟等とともに一宮川に沿うている。

夷隅郡下では大原町高谿、夷隅町松丸、峯谷、引田、大多喜町下大多喜上之台、内丘台、会所等の遺蹟が数えられる。これ等の遺蹟はいずれも近年の発見にかかわり、未だ十分な調査を経ていないが、中期から後晩期に及ぶ殆んど全型式の土器が散見され、東上総地方の弥生式文化も相当長年月にわたったことが考えられるのである。

即ち、宮之台式、登呂式、久ヶ原式、弥生町式、前野町式等を挙げることができる。就中、夷隅町引田から昭和三十七年秋に発見した久ヶ原式朱彩土器の一群は、房総の地では他に比類を見ない精美な土器であって、その器種に富み、石器を伴い、住居跡も完全な姿で発掘されている。その引田遺蹟は前述の綱島宮之台遺蹟とともに関東の弥生式文化を究める上での重要な遺蹟として、斯界から注目されており、東上総の地に極めて高度な弥生文化が築き上げられ、全関東に君臨した全貌が明らかにされることも程遠くないことと考えられるのである。

上総一宮貝塚

上総一宮貝塚は、一宮町の西方丘陵の北麓、標高約一〇mの低地字貝殻塚に在り、面積は狭小ながら典型的な外洋性貝塚

である。

明治二十五年の夏を茂原在の小舎に在る東条家で過ごした鳥居竜蔵氏は、そこに滞在中、夷陣並びに長生両郡下の古蹟を歴訪し、また民族の調査を行なった。その頃は先史時代の遺蹟は全く知られていなかったが、氏は茂原市綱島貝塚を発見して土石器類を発掘した。帰京後に人類学教室の助手になり、時の坪井正五郎氏に報告されたのが当地方の先史時代遺蹟が学界に報道された最初の事柄に属する。後年世界的な人類学者になった鳥居博士は、その後十余年を経て、明治三十九年の頃、上総一宮に在った松村任三博士の別荘を借り受けて、数日間滞在されたみぎりに一宮貝塚、石神貝塚、あるいは米満の横穴等を調査されたが、鳥居氏は遂に一宮貝塚の調査報告を発表されなかった。けれども上総一宮貝塚の名は「日本石器時代遺物発見地名表」に登録されて、斯界に著名な遺蹟となっている。

昭和二年九月、筆者はこの貝塚で縄文式土器片数個を採集して以来、三十有余年を経ているが、現在ではこの歴史的な一宮貝塚も殆んど煙滅状態であって、昔日の桑田の姿さえとどめていない。今私の貧しい野帳を繕いてその間の推移を辿ってみると、当時に在っては考古学や人類学を解する地方人は絶無の状況であったために、土器の大型破片も相当量が得られた。貝塚に隣接する瓦屋の老婆の採集保管していた鹿角や土器破片も恵与された。

昭和九年一月、鈴木早苗氏が採集に協力されることとなり、同十年春の頃から貝塚の取土工事を開始したために多量な土器片が出土した。鈴木逸一君、松崎松花氏等もまた時折この地で土器片を採集した。

昭和十一年の秋、筆者は取土工場の現場で貝塚の下部に瓮型土器二個を発見、採集復原し得た。同十二年に至っては獸類の歯牙、骨角、石皿の破片、原型をうかがえる程度の土器片等を採集したが、これ等はたまたま一宮町へ出向の途次に私の眼にふれたものみに止まり、遺物の大部分は護岸工事や、敷地の埋め立てのために搬出されたのであった。

同年六月十五日以降、史前学研究所は約十五坪を発掘調査された。大山柏氏を始めとする同研究所の企図している縄文式土器の編年学的研究の一環として行なわれたものであって、此の発掘調査の結果、復原できた土器は四個、土器の大型破片で器型を知ることのできたものは六点到止まり、他の遺物の出土状態や層位の上で特筆に値する事柄はみられなかった。

(大山・池上・大給 千葉県一の宮町貝塚貝塚調査報告 史前学雑誌 九―三三九)

昭和十六年三月下旬には法政中学校教諭松平義人氏が、生徒数名を引率して上総の遺蹟めぐりの途次に一宮貝塚を試掘された。その後大東亞戦下の慌しい幾年かは私の手記もこの方面の記事を欠いているばかりでなく、昭和十二年に大山柏氏一

行の発掘調査によって採集された一宮貝塚の遺物は、史前学研究所に落下した爆弾によって跡形もなく飛散してしまった。

戦後とみに盛んになった古代文化の調査の気運に乗って、九十九里沿岸漁村総合調査の一環として、この貝塚を慶応義塾大学院社会学研究科で発掘調査することとなり、昭和二十七年十一月八日から三日間、同学の松本信広教授、清水潤三助教授、学生十三名らが調査し、藤田亮策教授も来援された。

(清水潤三 九十九里沿岸に於ける低地遺蹟の研究(予報) 昭和二十九年)

その後も片岡組の取土工事は継続して行なわれ、海亀の甲、鯨、鮫、猪、鹿等の獸骨角や軽石製品などが相次いで出土した。昭和二十九年秋には清水助教授が前記調査の予報を発表されて一宮貝塚に言及されており、同三十年六月二十六日松本教授、清水助教授、東京大学の高井助教授等は一宮町奥谷の化石発見地を踏査されたおり、この貝塚に立ち寄りられた。

明治時代中期に、学界の権威に注目され、全国に著名になった一宮貝塚は十余年に及ぶ取土工事によって殆んど煙滅し、今日では僅かに貝層をとどめているにすぎない。そして本貝塚発見の遺物は前述のとおりに史前学研究所の所蔵品が全滅したので、慶応義塾大学の所蔵品と、筆者が保管中の若干とが主要なものとなっており、地元では玉前神社に土器片数十個を数え得る程度である。近く発表されるであろう清水氏の本貝塚の調査報告でも、この遺蹟の全貌を伝えるに足る資料は期待できないので、大山氏の報告文と筆者の管見にふれた遺物とを総合して一宮貝塚の片鱗を窺うこととしたい。

一宮貝塚発見の遺物の概観

1 自然遺物

昭和十二年六月中旬に行なわれた史前学研究所の発掘調査では、自然遺物は三動物門、七綱にわたる八十八種類を挙げている。

ことに水棲諸動物は豊富な資料を得、貝類は五十九種類の中に淡水産の貝六種を含んでいるので、河川や湖沼からの採取を思わせ、また岩礁地帯に栖息する貝類もまた多数検出できた。特に鯨及び海亀の遺骸は出土量が多く、鮫の歯を発見できたことはこの貝塚の一特色とされている。

背椎動物は四綱にまたがり、魚類は十種、爬虫類一種、鳥類六種、哺乳類は十一種を数えており、獸骨の出土が極めて多量であった。大山氏の発掘では人骨は僅かに一断片を検出したのみであったが、その後に行なわれた慶応義塾大学の発

掘に際しては、県道沿いの地点から完全人骨があるいは仰臥屈葬で、あるいは伸展葬の姿で三体発見できたことは、当時参観された地方人の記憶に新たなものがある。

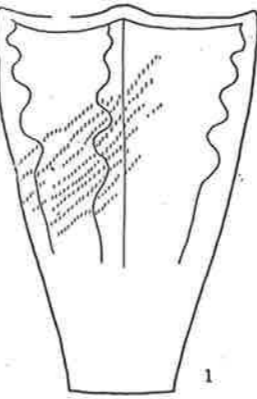
巨大な海亀の甲骨をたくさんに発見したことは、史前学研究所の調査報告でも特筆しているところであるが、昭和三十一年十一月十日、貝塚の西南隅に僅かに残存する貝層の上部に、海亀甲骨の集積した個所を発見した筆者はこれが採集につとめたおりの若干が手許に保管されている。

2 人工遺物

《繩文式土器》 一宮貝塚の人工遺物の中でもその主体をなしている繩文式土器は、広義の堀之内式に属する。即ち、繩文文化中期の終末期の所産である加曾利E式と、後期の中頃に行なわれた加曾利B式との中間に位する年代と考えられる土器である。従って加曾利EとBとの両者の特徴をそれぞれ備えている。

器肉が比較的薄く、器形は鉢、甕、椀、土瓶、高坏型等で変化に富み、細砂を多量に含み、質は脆く、黒褐色を呈するものが大部を占める。文様は粗雑なものと同精巧な施文とがあり、繩文は単一方向で、磨消繩文もまた多く用いられている。繩文だけで他の文様の見られない土器も相当量に達するが、装飾文様を施すといえども、沈線による渦文、入組文、平行線文がその主体をなし、粗放な文様のみで精緻な施文は殆んど見られない。土器の底部に網代文をとどめるものが数枚発見されているが、塗彩した土器は皆無である。

この堀之内式土器に新旧の二型式があり、旧型式は厚手で大型土器が多く、口縁突起が発達し、文様には加曾利E式の要素を多分に備えており、新型式は薄手の小型品が多く、口縁の突起は小さくなり、繊細な磨消繩文を施している。この両者とも今日ではそれぞれ独自の型式として認められているもので、上総一宮貝塚からはこの堀之内式土器の新旧両型式を出土する。



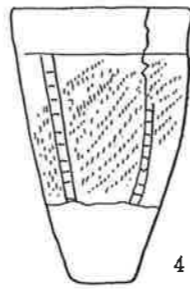
深鉢型土器

史前学研究所はこの貝塚の約十五坪を発掘して、採集した繩文式土器の破片は約三千個の多きにのぼった。そして型式を窺い知られる土器は十個ほどであり、概して簡素な施文をもつ一般的な大きさの土器で特異性は認められなかった。いまその二、三を略述すると、

《深鉢型土器(1)》 口縁上に四個の小突起があり、全面に施された繩文に



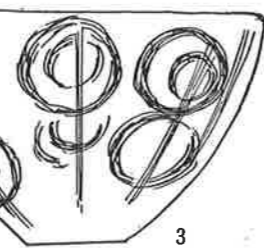
深鉢型土器



深鉢型土器

簡単な沈線文を施している。口径二十二cm、高さ三十三cm。

《深鉢型土器(2)》 口縁突起は二個、縦に一条の沈線を中心に不規則な鋸歯文や連弧文が発達している。1の鉢型土器に似たままで発見された。高さ二十九cm、口径十三cm、底径七cm。



鉢型土器



深鉢型土器

《鉢型土器(3)》 器の周囲に縦に数条の沈線を引き、これを中心として沈線による同心円が大小極めて無雑作に描かれている。口径三十cm、高さ十八cm。

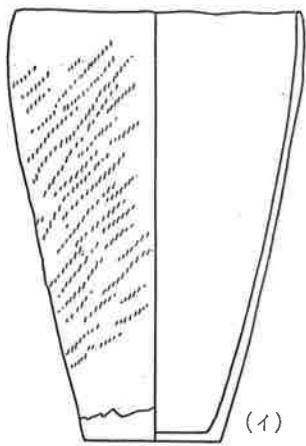
《深鉢型土器(4)》 器肉が比較的厚く、頸部以下、胴の中央部に一面の繩文

文を施し、相並ぶ二条の沈線の間刻目を施した裝飾帯は誠に簡素である。高さ二十二cm、口径十五cm。

《深鉢型土器(5)》 胴の下部を欠失、口縁に小突起をつけ、頸部に一条の沈線をめぐらし、縦に数条の平行沈線を描きその間を磨消している。現存の高さ十三cm、口径十二cm。

昭和二年以降、筆者等の採集、整理し得た繩文式土器の中からその型式の窺われるものを略述すると、

《深鉢型土器(1)》 大山氏の発掘調査に先立つ昭和十一年十月七日、土取工事のために露出していた貝層下の砂土層から破砕した姿で発見した。復原の結果高さ三六・五cm、口径三三・五×二四cm、底径一二cm、胴部の厚さ一二cmの円筒型とも称すべき単純な形で、頸部から胴部の全面には単一方向の歯状な繩文を施した深鉢型土器で、沈線による施文は全く見られない。

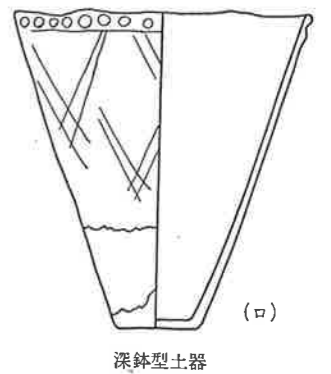


深鉢型土器

《深鉢型土器(口)》 昭和十一年の秋、(イ)土器を発掘した日、(イ)土器出土地点の東側数mの位置に夥しい灰層を認めたが、その下部にキサゴの集積した層中に直立した姿で発見した。

高さ三四cm、口径二二・五cm、底径八・五cm、胴部の厚さは一・二cm、全面赤褐色、口縁には粗大な連点文をめぐらし、胴部には二条の沈線を相交りさせた奔放な文様を施している。土質粗雑、焼成もまた脆弱である。

《皿型土器(ハ)》 昭和十年一月二十日、鈴木早苗氏の採集品で、高さ9cm、口径二九cm、底径九cm、胴の厚さ七mm、黒褐色、土質は比較的精良で単一方向の微細な縄文を全面に施し、口縁に穿孔を見る。



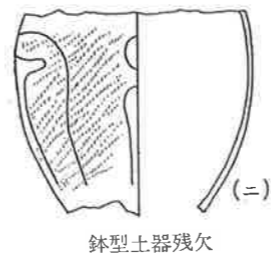
深鉢型土器

《鉢型土器残欠(ニ)》 昭和四年十月、貝塚の西南部の桑畑中で採集した鉢型土器の大型破片で、全型は窺い得ないがゆるやかな膨らみをもつ胴部で、右上から左下に向かって粗大な縄文を施し、これを地文として太い沈線による自由奔放な文様を大胆に描いていて、外海に臨む一宮貝塚人の潤達な気風を刺すところなく発現している。

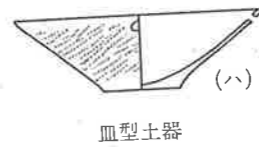
現存の高さ二五cm、胴部の最大径は約二八cmである。

《土器底部残欠(ホ)》 昭和二十九年十月三十一日、片岡組の取土工事現場で、下部の貝層中から発見した円筒型と考えられる土器底部の残欠で、現存の高さ一二cm、底は著しく大きく径一六・五cmを算し、土質は精緻、淡褐色を呈している。縄文よりもむしろ縹糸文に類似する施文を見る。

《鉢型土器(ヘ)》 昭和三十一年一月二十七日、貝塚の下部から発掘した。高さ一七・五cm、口径一七cm、底径九cmで底部は極めて重厚であるが、口縁部は薄くゆるやかな波状をしている。波状突起の下に穿孔しており、頸部に一条の沈線をめぐらし、胴部には粗雑な



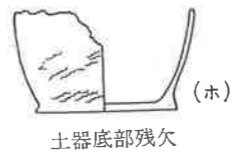
鉢型土器残欠



皿型土器



鉢型土器



土器底部残欠

縄文を付け、一宮貝塚人が好んで用いた沈線文を描く。大森式土器の退嬰的な土器の一例である。

《鉢型土器残欠(ト)》 昭和二十七年十一月採集、小型な鉢型で口縁部が波状突起をなし、頸部は内曲し、胴の上部が張り、この部分に施文が集中している。胎土は精緻で焼成もまた良好、磨消しの手法は極めてよく発達していることとあわせて、本貝塚出土の縄文式土器の中では最も器形の優れた部類に属する一例と考えられる。

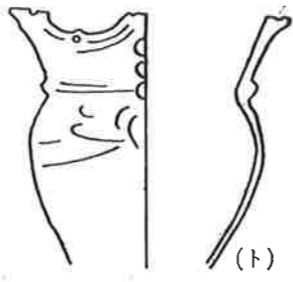
《鉢型土器残欠(チ)》 昭和三十一年十月二十六日及び同年十一月十日、貝塚西部の貝層中から海亀の甲骨とともに出土した。

土質堅緻、全面に赤褐色を呈す。

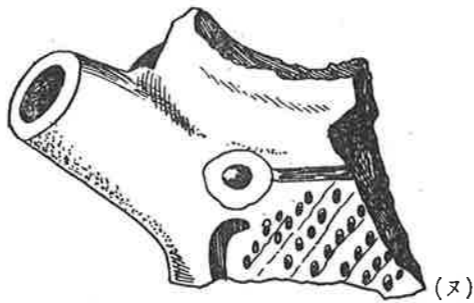
《顔面把手(リ)》 昭和十二年二月、鈴木早苗氏の採集された把手は、両眼と鼻を隆線で表現し、一見土偶の頭部とも見なされる顔面をもち、胎土、焼成ともによく、研磨された良好品である。



顔面把手



鉢型土器残欠



注口型土器注口部残欠

《注口型土器注口部残欠(ヌ)》 昭和十二年八月鈴木早苗氏の採集品、極めて短かい注口部をもち、沈線文と粗い縄文を施している。器体が球型、丸底の大森式に属するものと考えられる。

《編物圧痕の見える土器底部(ル)》 上総一宮貝塚出土の夥しい土器の中には編物の圧痕をとどめた土器底部が若干検出されている。その発見される歩合は僅かに五%程度であり、恐らくは鉢型土器に付随したと考えられる底径一〇cm以上の比較的大型の底部にこれを認める。

網代文は幅僅かに一・七mm、前後の細い材料で丹念に編んだもの、縄文原体による圧痕と考えられる施文には粗大な物と精細なものがあり、木葉文も唯一例ながら発見されている。

《石器及び骨角器》

本遺蹟では石製品や自然石の発見例が尠ないことは史前学研究所の発掘調査報告でも特筆している

ように、磨製石斧残欠三個、粗雑な打製石斧二個、敲石五個、錘石一個、石皿破片一個と軽石製品三個とが三日間にわたる大山氏等の採集品であった。

そして獣魚骨の発見が多いのにくらべて骨角具製品もまた案外に尠く、外洋性貝塚の特徴が認められない点を指摘しているほどで、釣針の残欠二個、鹿角製銚残欠三個、骨鏃一個、鹿角製縛飾品一個、骨製垂飾三個、鳥骨製尖頭器一個、具輪二個、同未完成品三〇個を挙げているにすぎない。以上の詳細は同研究所の調査報告書に譲り、また余の石器及び骨角器の管見にふれた若干について略述すると、

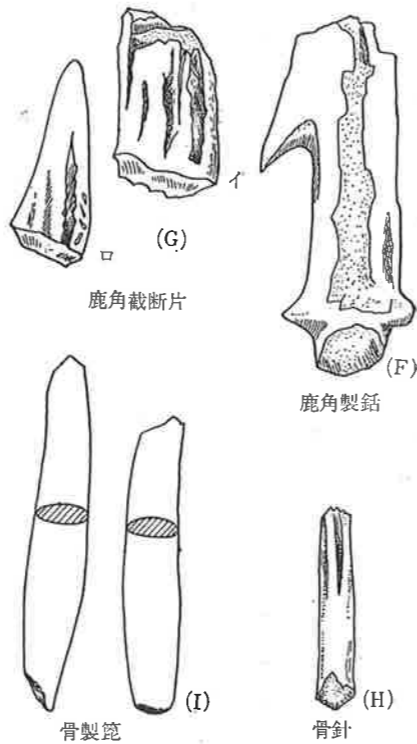
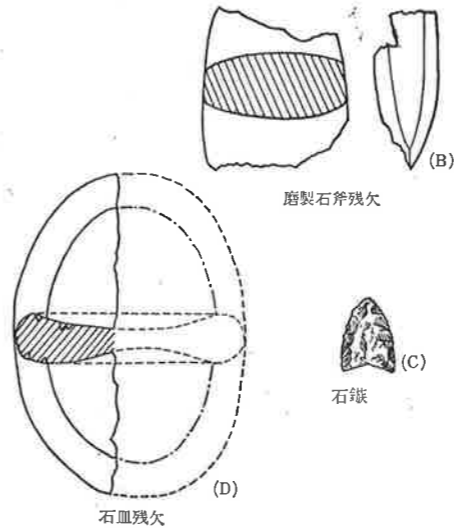
《磨製石斧残欠(A)》 昭和十一年一月鈴木早苗氏採集、磨製石斧柄部の残欠で現存の長さ僅かに三・五cmでその型式を知るを得ない。

《磨製石斧残欠(B)》 昭和二十七年十一月九日、慶応義塾大学の発掘に際して出土した磨製石斧刃部の残欠は、現存の長さ四cm、側縁に稜があり厚さ一・七cmで重厚な感じをもっている。石器の発見例に乏しい一宮貝塚での代表的な資料である。

《石鏃(C)》 獣骨を多数出土するのに石鏃の発見例は稀少で、大山氏の報告文には記述がなく、慶応義塾大学の発掘中に黒耀石製の不完形品二個を採集したにすぎない。筆者も過去三十二年にわたる踏査にも完形品は僅か一個を得たのみである。

《石皿残欠(D)》 昭和十三年五月二十六日採集、砂岩製で全形は楕円をなすものとおぼしく、周辺は円く整形し、器の上下両面を磨り凹めてこの両面に穿孔を認める。現存長さ一二cm、周辺の厚さ四・五cm。

《敲石(E)》 昭和三十八年二月十日、私は貝塚の一隅に残存する貝層中に露出している一塊を発見したが、これは地質時代の鯨肋骨化石の断片であった。由来石材の入手に困難なこの地方では一個の敲石たりとも得難いので諸種の代用品が随時利用したことが考えられる。この鯨化石は当時の海辺に打ち寄せられた天恵の資源であった。



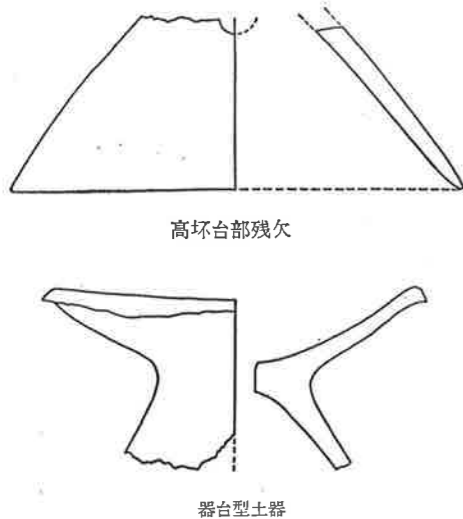
存四cm、整形のための研磨の痕をとどめている。

《骨製篋(I)》 昭和三十四年十月十五日、貝塚西南隅の貝層下部から発見した骨製篋は残欠二個、一は長さ五・八cm、最大幅一・三cm、他の一個は長さ七cm、最大幅一・三cmである。

上総一宮町発見の弥生式土器

一宮町の先史時代遺蹟は、前述の貝塚が代表して自余の遺蹟については顕著なものに接していない。待山地先、あるいは東浪見網田の台地には往々土器の散布を見、その中には後期に属する弥生式土器も検出できるが、それぞれの遺蹟の核心は未詳である。散見される弥生式土器も残片が大部分を占めていて、その型式を知るに足る資料として従来注意にのぼったものは寡聞にして僅か一、二例にとどまる現況である。

《高坏台部残欠》 昭和四年六月二十日、野中地先の県道南側の畑地で採集した。高坏の台部の破片で全面赤褐色を呈し、内外面ともに刷毛目の痕をとどめており、上部の欠失部には円形の窓四個を穿った弥生式後期の



《鹿角製銚(F)》 昭和二十七年十一月採集品 鹿角製銚の残欠で基部の突起と逆刺一個とが完存している。現存長さ七cm。

《鹿角截断片(G)》 昭和四年五月七日、貝塚隣接地の瓦屋の老婆から恵与された鹿角の第一枝の上部を丹念に磨り切った断片は、骨角器の製作過程を思わせ、切断された基部は原始農耕具の一として利用された。上図イロは昭和三十四年十月採集。

《骨針(H)》 昭和二十七年十一月採集品、現

所産である。

《器台型土器》 一宮川の関東台地先、護岸工事に際して同地の小高鼻氏が川底から採集したものであり、その出土地点は不明である。

二 上総一宮周辺の原史時代文化

——一宮町待山の遺蹟について——

昭和三十七年十二月十七日、上総一宮町南待山の近藤信次氏の居宅の南側に続く老化茶園を抜株して、果樹園を造成するために掘り取り作業中に、土器類多数を発掘した旨の通報に接して同月二十日現場を踏査した。

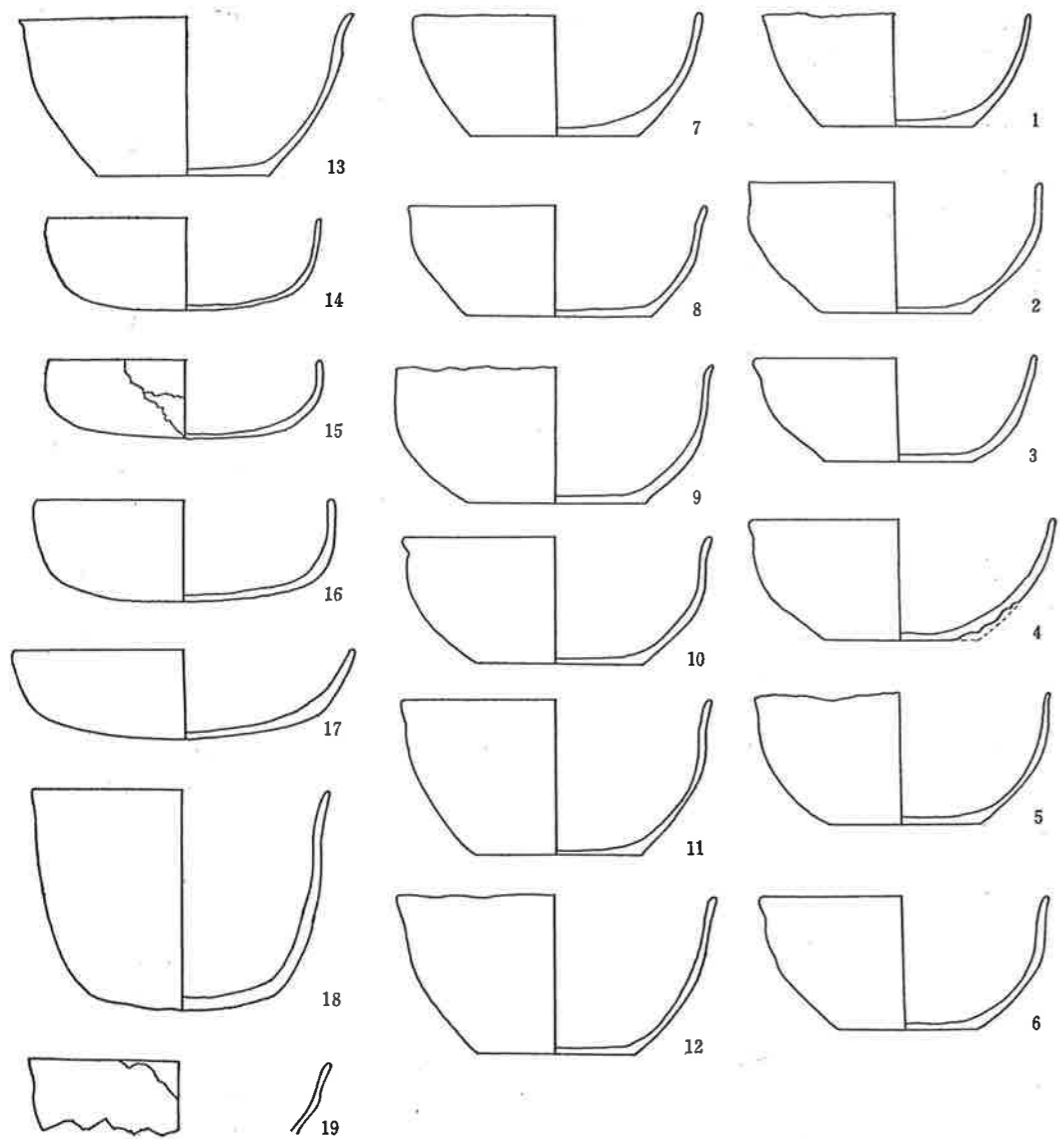
待山付近の地勢 上総一宮町から西方約一・五km、大多喜町に通ずる県道に沿い、五万分の地図上の野中は四周水田にかこまれた低平な台地上の集落で、東北の二帯は九十九里平野に臨み、西南方は僅かな耕地をへだてて上総丘陵の突端が迫っている。野中の北方一、〇〇〇mを一宮川が東流し、川島地先で分れる支流の瑞沢川は野中の西南方の支谷を溯っている。この支流の沿岸には陸沢村川島、下之郷下町裏、同上之郷谷原、同女ヶ堰、同長栄寺堂前、大上房谷、同殿部田、同地藏堂等の遺蹟が連続し存在していて、弥生式の末期から初期の土師器和泉式から鬼高式、国分式に至るまでの土師器や須恵器を豊富に埋蔵し初期の古墳を代表する能満寺古墳もまたこの支流に沿っている。

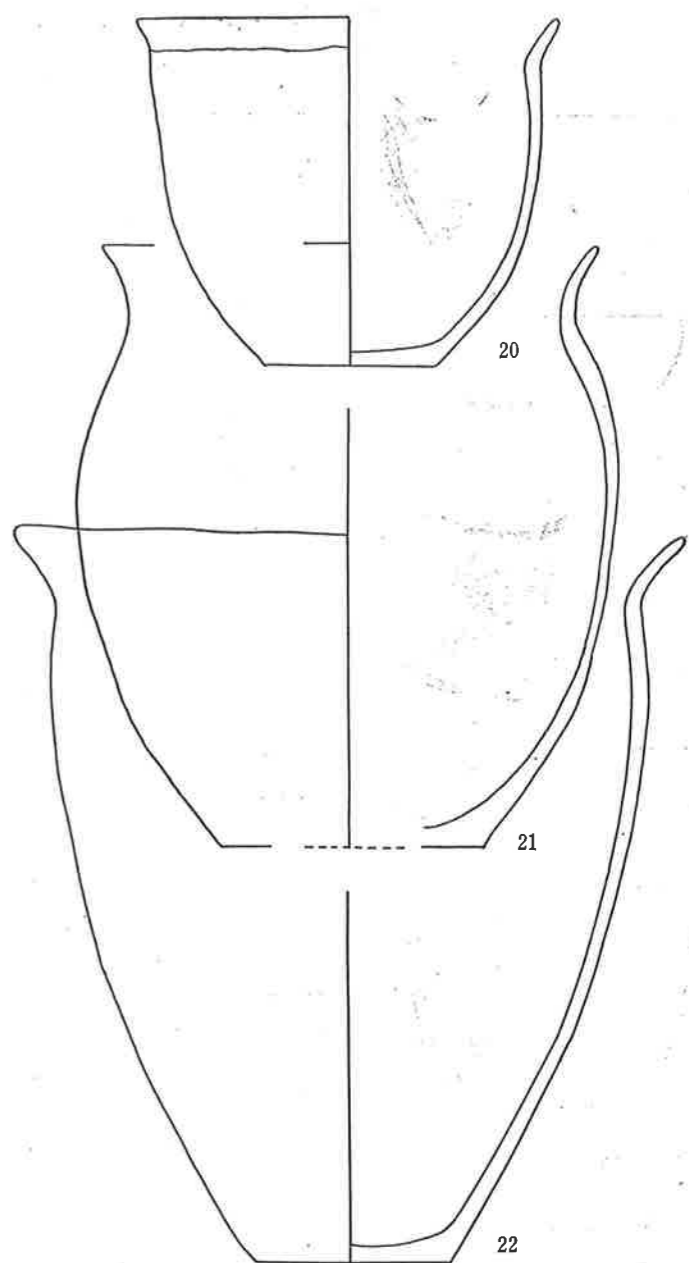
また、丘陵には一宮町細田を中心とした一宮横穴群を始めとして、陸沢村、長南町には随所に横文古墳がみられる。待山の地は概ね畑地でその間に宅地、平地林とが点在し、明治中期にはこの平地林に「セツ塚」と呼ばれた封土が在って、古墳の一群落を形づくっていた由である。現在も崩壊に瀕した二、三の封土が数えられ、近藤氏の居宅内にも近年まで一基の古墳が存したが、十数年以前に取り崩した由である。待山の東方三〇〇mには一宮貝塚があり、細田出口に連続する畑地には各種の土器片が散布している。

土師器の竪址

近藤氏の茶樹掘り取り作業中に、基盤の荒い砂層の中に粘土を搗き固めたかまど状の遺構を発見した。砂層を三〇cmほど掘り凹めて長さ約一m、幅六〇cmほど、高さ三〇cm位の立方体の上部には破砕した一土器を据え、この土器の底部からは横に粘土でパイプ状の施工が見られ、あたかもフイゴを思わせる状態であった。上部に取付けた土器の内側には碗型土器を数個いれてあり、土器の外側はこれまた粘土で饅頭形に蔽い、遺構全体がよく焼成されていた。私の踏査し

待山土器実測図





た折にはこの遺構は既に取崩されていて、その状況は見るを得なかったが、焚口と煙道とを備えた小型窯であったことが考えられる。椀型土器を容れたままで発見した瓮型土器は復原の結果、高さ二〇cm、口径一六・六cm、胴部の最大径一八cm、黒褐色を呈した瓮の底部を欠失したものを利用したことが知られた。(21号土器)

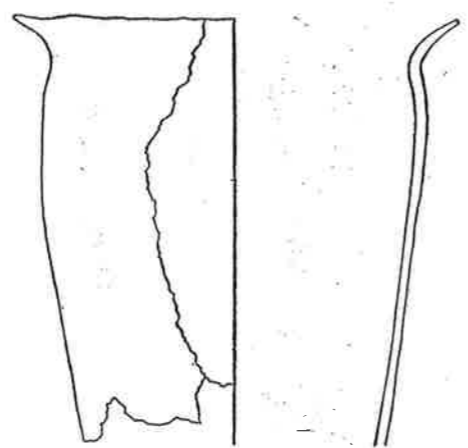
この窯址の北側に約二mをへだたせて地表下約四〇m、基盤の砂層中に今一個の粘土集塊を認めた。踏査のみぎりにこれを切崩したが人工遺物は検出できず、この粘土塊は恐らくは土器作りの胎土かもしくは窯の補修や目塗り用にあてたことと思われる。粘土集塊の東側に接して筒型の瓮一個(2)が口縁部を北に向けて横たわった姿で発見された。

伴出遺物の出土状態 窯の遺構に接して、土師器の椀、鉢型土器が四重ねほど発見された。これらの土器はやや大型の土器を下部におき、順次小型品を整然と五個ずつ重ねており、各々の土器の間には砂が充填していた。この椀や鉢型土器と

ともに破砕した瓮型土器の破片が散乱していたが、無雑作な作業中にこれらの遺物の大部分は破砕された。

以上から考察すると、この土師器の焼成施設は、その作業が継続されている間に何かの事情によって放棄、埋没し去った状況をとどめている。土師使用時代の天災地変、地域の上から津浪などが思い浮かべられるのである。

遺物の考察 筆者はこれらの土器の復原につとめ、十二月二十日以降歳末までの間に大体の型式を窺えるまでに復元、実測をおえ、翌三十八年一月五日再度現地を踏査したおりに、近藤氏が保管していた土器四個をも加えて、待山出土土器の集成を終った。土器は椀型、深鉢型、瓮型の三種に分類することができ、型式の判別できる土器は二十五個であった。



椀型土器(1-10、14-17)出土土器の大部分は椀型に属し、これを平底、丸底とに分類できる。個々の測定数値は繁を避けて便宜表示する。

深鉢型土器(11-13・18)椀型の中で口径に比べて器高の大きな一群で、唯一例ながら丸底をみる。

瓮型土器(20-23)胴部は概ね筒型をなし、口縁が僅かに外反し、胴部に縦の筧痕が顕著に認められる。器体の胎土が剥落し、二次的に焼かれて、煤、炭化物が凝固付着したものが多い。

待山遺蹟は僅かの地積を不用意な作業中に発見された窯址とその周囲に放置された一群の土器だけが現在知られているすべてであるが、この作業の進捗に伴って資料の増加が予測される。

当地方に幾多の出土例をみる鬼高式文化の特殊遺蹟として注意せらるべきである。本稿を起草するにあたり、近

土器実測数値 (cm)

型式	番号	口径	底径	高さ
椀型	1	12.0	6.5	5.0
	2	12.0	7.0	5.8
	3	12.5	7.0	4.6
	4	12.8	7.0	5.5
	5	12.5	7.0	5.7
	6	12.5	6.5	5.8
	7	13.0	7.5	5.5
	8	13.0	8.0	4.8
鉢型	9	13.0	8.0	6.0
	10	13.5	7.4	5.6
	11	13.5	7.4	6.8
椀型	12	14.0	7.0	7.0
	13	14.2	7.4	7.1
鉢型	14	12.0	円底	4.2
	15	12.0	"	5.6
鉢型	16	13.0	"	4.6
	17	15.0	"	4.0
瓮型	18	13.0	"	9.8
	19	13.2	?	現存3.2
	20	14.0	5.8	11.6
	21	16.6	8.5	20.0
	22	25.0	6.5	24.0
	23	22.0	?	?
	24			
	25			

藤信次、田辺三郎氏から多大のご便宜を戴いたことを付記しておく。

一宮町の横穴古墳群

上総一宮町の西北部に連なる丘陵地帯には到るところに横穴古墳が分布している。内宿、袖ノ木、細田地先には特に密集しており、その概報は昭和三年三月発行された「千葉県史蹟名勝天然記念物調査」第五輯に載っている。

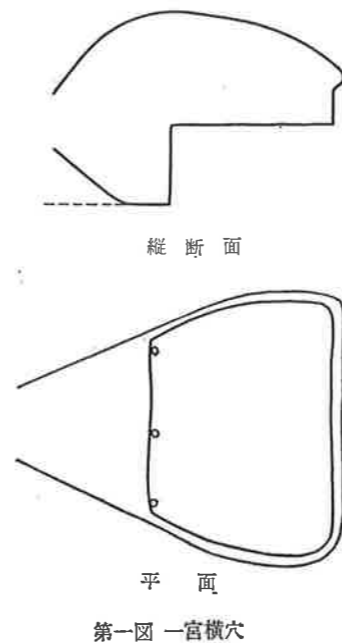
「長生郡一宮町ノ横穴ハ約二十町四方ノ地ニ散在シ、其ノ数二十五ニ達シ、何レモ丘陵ノ中腹ニ設ケラル。分布ノ状況ハ浅間一、岡田前五、小池東側一〇、小池西側四、細田東側一、招ケ谷二、道祖神一、貝塚一ナリ。

浅間ナルハ第一図ニ示スガ如キ形状ヲナシ、入口ハ高サ一尺八寸、匍匐シテ僅カニ入ルヲ得レドモ、内部ハ広クシテ階段ヲナシ、段ノ高サ五尺ニ及ビ、段上三方ノ壁ニ棚アリ。棚ノ高サ二尺四寸、幅ハ広サ不定ニシテ、最モ狭キトコロ二寸、最モ広キトコロハ七寸ニ及ブ。段ノ辺縁ニ図ニ示スガ如ク三個ノ穴アリ、内二個ハ完全ナレド、一個ハ破レタリ。其ノ直径一ハ三寸五分、一ハ四寸アリ。何レモ奥ニ向ヒテ深サ約二尺アリ。天井ハアーチ形ヲナシテ段上ヨリノ高サ六尺五寸ニ及ブ。

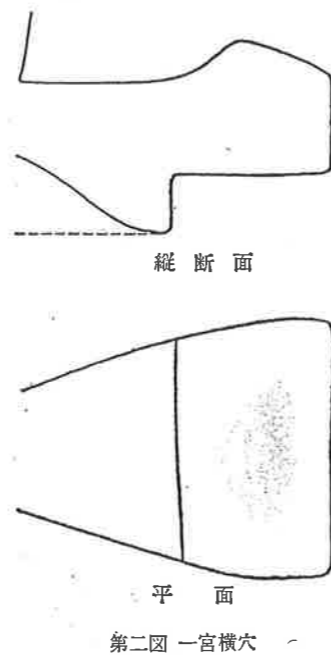
岡田前ナルハ五ハ並走セル南北ノ丘陵ノ中腹ニアリ、南部ニ二、北部ニ三アリ、南部ナルハ約三間ノ距離ヲ隔テテ東西ニ並ベリ。内部何レモ階段ヲナシ、其ノ一ハ第二図ニ示セルガ如キ形ヲ呈シ、段ノ高サ三尺三寸、段上ノ面積三坪余、天井ハ略二等辺三角形ノ形ヲナシ、棟ニアタル部ノ高サ段上ヨリ八尺四寸五分ニ及ブ。

北部ナルハ丘陵軸線ノ方面ニ三アリ、中一ツハ独立シテ高処ニ、他ノ二ハ之ヨリ東方低所ニアリ、約四尺ノ距離ヲ隔テテ並ベリ。高処ナルハ低部平坦ニシテ、間口九尺五寸、奥行五尺二寸、高サ三尺七寸アリ。他ノ二ハ埋没シテ内部ヲ窺フコトヲ得ズ。

小池東側ニアルモ亦丘陵軸線ノ方向ヲ取り、中腹ニ数間乃至十数間ヲ隔テ、線状ニ排列シ、南部ニ三、中央部ニ六、北部ニ一アリ。此ノ十個ノ中、底部階段ヲナセルモノ四、平面ノモノ六アリ。階段ヲナセルモノ、中、段上三方ノ壁ニ棚ヲ周ラセルモノ一アリ、棚ノ高サハ五寸



第一図 一宮横穴



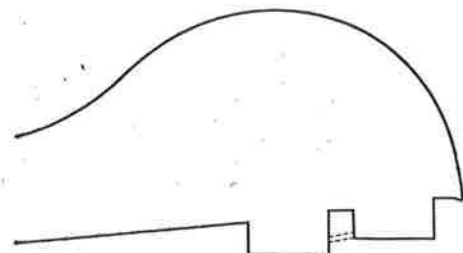
第二図 一宮横穴

ニテ、中ハ一尺ナリ。

凡テ是等ノ横穴ノ入口ハ東南乃至西南ノ方向ニ向ヒ、多クハ入口小ニシテ、殆ンド皆崩壊セル土塊堆積セリ。内部ハ次第ニ広ク、底部ハ其ノ形状角ノ取レタル梯形ノ如キモノ多シ。岩質ハ砂質凝灰岩ナレハ工ヲ施スニ容易ナリ。岡田前ナルハ内部ニ「きさこ貝」ト「はまぐり貝」トアリタレド、他ノ穴ニハ何等ノ遺物ヲ存セズ、又既往ニ於テ何等発見シタルモノナク、又伝説アリシヲ聞カズ。以上二十五ノ中、踏査セルハ浅間一、岡田前五、小池東側一〇、ノ十六ニ過ギズ。

一宮町の横穴古墳を通観するに、その規模の小型な横穴では、羨道の設けもなく、羨門から直ちに玄室に続き、穹隆型の天井をもつものが多く、ために玄室の床面も羨門の下底部と同一の平面上にある。やや規模の大きな横穴では羨道の下底部と玄室の床面とは、三―六尺の差を示すとともに家型の天井をもつものがみられる。玄室内の棺は床面を僅かに掘り凹めて、一個あるいは二個の棺を設けており、内部の構造には特筆すべきものはない。そして、横穴の大部分は開口後久しく地方人の出入、利用に供されているために埋葬した遺骸はもとより、遺物の残存する横穴は殆んどない状況である。

上総一宮町横穴の一例



昭和二年八月以降、数次にわたる私の踏査では、僅か一例の横穴から人骨及び鉄鏃一個を検出し得たのみである。当時県立大多喜中学校の生徒であった筆者は学友吉原浩三君とともに、一宮町待山近傍の今堰周辺の横穴古墳を調査した。その一は今堰東南方の山麓に連続するものの一個であり、羨門から奥壁までの長さ十尺二寸、玄室は幅九尺、高さ五尺六寸で比較的小型に属し、床中には横に並ぶ二棺を備えていた。棺は両者とも長さ約六尺、幅二尺、深さ六寸、玄室の周囲には溝を穿ち、棺の側壁にも穿孔して排水に便していた。

二個の棺からそれぞれ人骨を発見したが、歯牙の出土した位置から右側に頭部を置いた

と考えられ、発見遺物は腐朽した鉄鏃一個のみで、鏃の基部には麻様の繊維を捲いた痕蹟を認めたと、鏃の身はその型式を知ることができなかった。

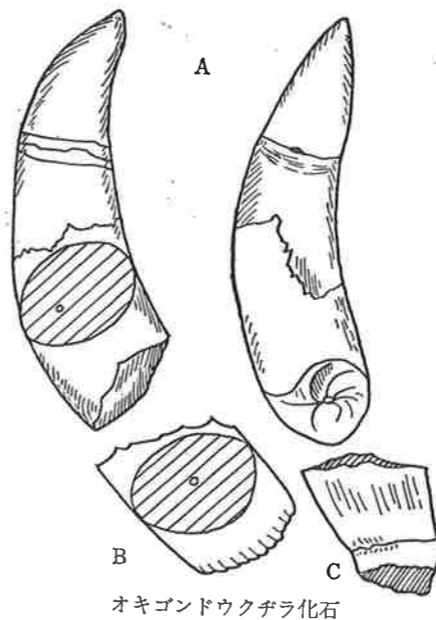
同日今堰西側山麓のやや大型の横穴を試掘した。貝殻を遺棄して発掘は困難であったが、吉原君は青銅製の天正煙管一個を発掘した。桃山時代かあるいは江戸初期には既に開口して地方人が出入していたことを偲ばせる遺品である。

三 上総一宮町発見の古生物資料

オキゴンドウクヂラ化石 昭和三十年一月十日、一宮町奥谷の土木工事現場から動物化石を贈られた私は、二月十二日現場を訪れて発掘者から発見当時の事情を訊ねた。

発見した地点は奥谷庚申前の道路工事の際に切土した丘陵の突端、現在の路面よりは三米余り上部の凝灰岩の層で、顎骨を伴う歯牙は三十余个に達したが、その大部分は無心にも破砕された由である。

同年六月二十六日、慶応義塾大学松本教授、清水助教授、東京大学理学部高井教授等はこの化石出土地点を調査されて、オキゴンドウクヂラと断定された。

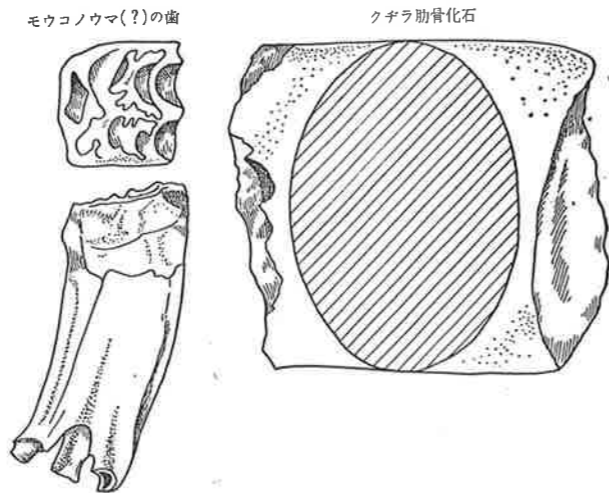


オキゴンドウクヂラ化石

一宮町奥谷発見例が第二番目の資料として確認されたほどに発見例が少ない。

当日高井教授の調査されたのは歯牙の断片数十個で、一宮町に二個を保留し、残余はすべて東京大学に寄贈した。私の許に贈られた三個の中、やや完存する一個(上図A)についてみると、現存の長さ五・五cm、破砕部の径一・七×一・五cmでやや楕円をなし、中央部に一小孔をみる。先端ホロー質の部位は濃風色で、その他の部分は暗褐色で滑沢がある。上図のB、Cはそれぞれ別個体の歯牙のその基部である。

クヂラ肋骨化石 昭和三十八年二月十日、一宮貝塚の西



端に残存する貝層の上部から出土した。その形状と大きさが敵石に格好な処から先史時代人が日常敵石として利用したと考えられる。

一宮貝塚が生成された頃、現在の一宮市街地はもとより、関東台と川島との境界線までも外洋の波濤に洗われていた約四千年以前に、この海岸に漂着したものを先住民が拾得したと思われる。

関東台の西側を北方に流れる小川の両岸には当時の汀線と見做される岩礁と、沢山な種類の貝殻が累積し、同地の小高昇氏の採集品の中にはクヂラ化石の断片若干が検出できる。(上図参照)

モウコノウマ(?)の歯 昭和三十年頃、東浪見釣の外堰砂丘から獣類の歯牙、人骨数体が相ついで発見された。出土地が砂丘であり、出土状態も未詳なためにその属する年代については十分な考慮を要するが、房総で発見された他の資料からモウコノウマの臼歯と考えられている。現存長さ六・九cm、上面は一・四×二・六cmの略方形である。(上図参照)